楽しかった家庭を戦争が壊した

山口　武彦

　昭和十六年、太平洋戦争に突入した時に私は、国民学校の一年生になった。毎日のラジオは華々しく戦果を発表していた。ラジオを聞きながら、私は単純にも強い日本軍に対するあこがれの気持ちと「鬼畜」と言われた米英に対する憎しみの感情を日々強めていった。大きくなったら立派な兵隊になろうと強く思い込んでいった。命をかけて戦争に反対していた人もあったというのに。

　教室ではほとんど毎日、お父さんを戦場へ送り出した子供が席の前に出て紹介され、銃後の家庭を守るように先生から励まされた。

　そのうち私の父も召集され、級友の前でたたえられた。そのことが今後どんなに苦難をもたらすことになるか、また、父にとってもどんなに苦痛だったのかを一年生の子供が知るよしもなかった。

道路には米英の国旗が描かれて、それを毎日踏みつけて登校したり、「ほしがりません勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」等の標語が町にあふれ、戦争への総動員体制が進められていった。日常品も日々乏しくなっていった。

私の祖父は、和菓子を製造販売していたが材料が手に入らなくなり、また、機材の金属が武器を作るために必要ということで強制的に買い上げられ、廃業に追い込まれた。祖父母にとっては頼りの息子を兵隊に取られ、残された家族の生活を守るのに必死だったのだろう。四国の山奥に果樹園を購入し、疎開していくことになった。

誰も買い手のつかないような荒れ地を、足元をみられて高い値段で買わされたと、母がよく愚痴を述べていた。電気がない、水道がないランプの生活だったが、ランプをともす石油も手に入らなくなり、松根を細く切って燃やし明かりをとるような毎日だった。便利

な都会から山奥の原始的な生活に入ったため、母は祖父母に当たり散らしていた。祖父母と母の親子げんかを子供心につらいおもいで聞いていた。悲惨さは日を追ってひどくなり、荒れ地を開墾し芋を作るのがいつしか日課になった。

　慣れない作業にみんな疲れ果て、京都の生活をなつかしがった。「お前たちの生活を守れなくて済まない。」とわびながら祖父、祖母ともやせ衰え、栄養失調で死亡していった。口を減らすために私は父方の広島の山奥に預けられた。「兄ちゃんは大きくなったんだから、賢くしなさいね。」別れ際の母の言葉に泣きじゃくりながら「お母ちゃん、お母ちゃん。」心の中で叫んで、母から離れていくつらさに耐えていた。

　戦争が、楽しかった家庭を壊してしまった。戦争が暴力的に一人一人の生活を犠牲にしたことを肝に銘じて、平和を守るように努力していかなければならない。